

踏みこんだ検討を望みたい問題である。

こうした問題は、さらにいえばモデルの構成要件にかかわっている。どのような構成要件をもち、みられている場合に、それを他と論理的に区別される「モデル」とするのが明示されなければ、それを使って制度や組織を類別し、比較検討することはむずかしく、分析は恣意的になりやすい。モデル問題に関心をもつ私自身にとっての自戒の意味をこめて、そのことを強調しておきたい。

以上、「モデル」にかかわって、いくつかの問題点を指摘させていただいたが、よく読みこまれた資料にもとづく本書の内容は、比較高等教育研究だけでなく、日本の高等教育・大学史、さらにはユニバーサル化の進む高等教育の現実に関心をもつものにとっても、きわめて刺激的である。わが国の比較教育学研究が到達した、ひとつの高みをあらわす著作として多くの研究者に読まれることを期待したい。

なお、さまざまな事情が伏在するのではあろうが、1995年2月に刊行された本書が、97年3月に第2刷が出たあとようやく書評の対象として取り上げられるというのは、遅きにすぎるとはではないか。書評対象の選定・依頼の方法に、一考を望みたい。

(名古屋大学出版会刊 1997年3月発行 306+ii頁
定価 6,300円)

藤井 敏彦 著『マカレンコ教育学の研究』

橋迫 和幸 (宮崎大学)

本書は、集団主義教育理論の創始者の一人である旧ソビエトの教育実践家・理論家、アントン・セミョーノヴィチ・マカレンコの教育思想を体系的に研究した労作である。

本書ではまず、マカレンコ教育学の基礎をなす人間観について、とくにソビエトの文豪、マクシム・ゴーリキーの思想的影響が明らかにされている。著者によれば、マカレンコがゴーリキーから学んだもっとも大切な思想は、「人間に対するできるだけ要求と人間に対するできるだけ尊敬」という人間観であり教育思想である。

次いで、ゴーリキーにちなんでゴーリキー・コロニヤと名づけられた浮浪児・非行少年収容施設での実践経験をまとめた『教育詩』に即して、マカレンコが集団主義教育理論を構築した経過が克明に分析されている。マカレンコはロシア革命直後の1920年代に、極度に困難な条件のもとで悪戦苦闘しながら、浮浪児・

非行少年たちの再教育にあたった。それは、新生ソビエトにふさわしい社会主義的人間の育成をめざした実践であった。

続いて、マカレンコ教育学理論の本質が解明されている。マカレンコはその晩年に、ゴーリキー・コロニヤを始めとする施設での15年間にわたる自らの実践を理論化することに努めたが、その仕事を完成しないうちに急逝した。著者は未完に終わったその理論化の課題に取り組み、マカレンコの教育実践から訓育論として一般化できる法則的原理を導き出すことをめざして、かれの科学的訓育論の特質、訓育手段の合目的性と弁証法性思想、「平行的教育作用」の概念と作用構造、集団づくりの具体的方法論などについて包括的かつ詳細な分析を行なっている。

本書ではさらに、マカレンコ教育学の評価が考察の対象とされ、ソ連国内における評価だけでなく、西側諸国を含む諸外国でのマカレンコ理論の受容や影響の過程を詳細に検討することによって、マカレンコ教育学の普遍的価値の解明が行なわれている。

本書は1976年に著者の博士論文として著されたものであるが、一部を除いて、その全容がこのような形で公刊されたのは、それから20年以上を経た1997年のことであった。この間には、旧ソ連の解体と社会主義・共産主義の世界的な退潮という大きな歴史的変動があった。そうした状況のなかであえて本書を世に問う意義は、どこにあるのだろうか。それを問うことは、本書の意義を明らかにするだけでなく、新生ソビエトにおける社会主義の建設という政治的社会的課題と密接に結びついていたマカレンコ教育学が、その歴史的社会的制約を越えて、人間の形成とその働きかけという教育の普遍的原理の解明にどこまで貢献しているかを明らかにすることでもある。さらにいえば、それはまた、この同じ20年余の間における、一方でのわが国の子どもと教育をめぐる諸問題の深刻化、他方での子どもの権利条約を中心とする国際的な教育理念の進展という事態をふまえて、マカレンコ教育学の現代的意義を問うことでもある。

本書において明らかにされたマカレンコ教育学の本質について、評者はとくに次の3点に注目したい。第1は、著者がマカレンコ教育学における人間観・教育思想の基礎として明らかにした、「人間に対するできるだけ要求と人間に対するできるだけ尊敬」という思想である。それはいかなる教育にも貫かれなければならない普遍的理念であるだけではない。今日のわが国における子どもの荒れと教育の荒廃状況を前にするとき、そしてまた子どもの権利条約の理念に立つとき、子どもをどこまでも人間として尊敬し、またそれゆえ

にどこまでも要求するというこの思想は、とりわけ現代的な意義を有するものとして注目する必要がある。

第2は、「訓育手段の合目的性と弁証法性」の思想である。著者は教育手段の目的志向性をマカレンコ教育理論におけるもっとも重要な原理の一つとしている。マカレンコによれば、労働をも含めて、いかなる教育方法も無条件に訓育の手段たりうるのではなく、それがどのような目的をめざし、その目的のために組織された訓育過程全体のなかにどう有機的に位置づけられるかによって、その教育的価値が規定される。マカレンコは、当時ソビエトにおいてさえ支配的であったさまざまな観念論的教育理論との闘いをおして社会主義教育理論の確立をめざすなかで、このような結論に到達したのであったが、それは同時に訓育の普遍的原理を示すものでもあった。わが国の場合、とくに訓育の分野では、上から一方的に示される教育目的と父母・国民が本当に願う目的とのせめぎあいのもとで、しかも既存の様々な教育手段が無前提に一定の訓育的効果をもたらすと信じられている状況がいまだに根強い。このようなわが国の状況を見ると、マカレンコのこの思想は今あらためて注目されなければならない。

第3は、「見通し路線」という思想である。これは、子どもたちに明日の喜びへの展望、しかも自己の将来を集団や社会の未来と結びつけた展望を抱かせることが、社会的自覚をもった集団主義的人間を育成するという思想である。方法論的には、それは卑近な楽しみや欲求充足をめざす「近い見通し」から始まりながら、時間的にいくらかはなれた、しかも集団的広がりをもった「中間の見通し」(仲間との楽しい行事の計画など)を経て、やがては自分たちの集団の将来や、さらには国や社会の将来に及ぶ、はるかな未来への「遠い見通し」へと発展させられていくものである。当時の歴史的事情から、マカレンコ自身の「見通し路線」の展望はソビエトという国の将来についての展望にとどまっていた。しかし、それは「論理必然的にはさらにソ連邦をこえて全世界に、全人類の解放と幸福へと発展すべき性格のもの」と著者はいう。この指摘は、現代にも通ずるマカレンコ教育学の普遍性を深くとらえたものといえよう。わが国の教育の現状では、少なくとも個々人のレベルでは、しばしば教育の目的が社会の将来への展望との結びつきを欠き、個人的・私的・幸福という目的に矮小化される傾向がある。しかも、それは子どもたちに個人的生活においてさえ未来への希望を抱かせるものになっていない。このような現代日本の教育の状況をかえりみると、マカレンコの「見通し路線」は、子どもたちに一人の人間としてだけでなく、社会の一員として生きる意欲とめあてを与える

という教育の本質的任務にかかわることがらとして、あらためてその意味を深くとらえることが求められる。

ところで著者は、「平行的教育作用」をマカレンコの集団主義教育理論の基本原則としている。そのこと自体には異論はないが、しかしその概念のとらえかたはなお十分ではないように思われる。端的にいえば、著者は「平行的教育作用」を、集団をとおして個人に働きかける方法ととらえている。すなわち、教育者は直接には集団に働きかけ、それを受けた集団が教育の主体として個々人に作用を及ぼすのであり、それをとおして個人は集団の有機的な成員として育てられるというところである。「平行的教育作用」とはこのような概念であるのに、ソビエトの教育学者の間にさえ間違った理解のしたかがあると著者はいう。しかし、その間違った理解の一例として挙げられているイ・エフ・コズロフの論文について、評者はむしろ、この論文こそ「平行的教育作用」概念のより深い把握を示すものと考え。手短にいうなら、コズロフは、子どもたちの集団的生産労働を含めた生活活動そのものが、生活の必要を満たすと同時に、それと“平行”して人間形成的作用を及ぼす過程を、マカレンコのいう「平行的教育作用」の本質ととらえている。たしかにマカレンコ自身の著作では、集団をとおしての個人への作用を論ずる文脈のなかで、その原理を「平行的教育作用」と名づけている。その限りでは、著者の理解は誤りではない。しかし、マカレンコは別のところで、教育者が個人の前面に出ることを控え、集団をとおして間接的に働きかけることを重視するのは、子どもたちに、自らを教育の対象である前に、何よりも一人の人間として、市民として自覚させることが大切であり、それこそが大きな人間形成作用をもつからだとして述べている。要するに、集団の一員としての自覚を育てるといっても、それはたんに教育される集団の一員としての自覚ではなく、自ら目的をもって主体的に生活し活動する集団、しかも国家や社会と有機的に結びついた組織として一定の社会的使命を果たす集団の一員としての自覚を深めさせることこそが大切なのであり、コズロフの論文はそのことを指摘したものと思われるのである。

もう一つ、評者にとって疑問なのは、著者がマカレンコ教育学の独自性ととも問題性を明らかにしたことが本書の特徴の一つであるとしながら、しかしマカレンコ教育学の限界を十分には指摘していないように思われる点である。それはとくに、政治と教育との関係をマカレンコがどうとらえていたかという問題にかかわる。マカレンコの理論と実践を政治と切り離してとらえるのが誤りであることは間違いない。その限り

では、著者がとくに西側諸国に見られるマカレンコの非政治的理解の誤りを指摘しているのは大切な点である。マカレンコはソビエト国家の社会主義建設を担う人間の育成をめざしたのであり、そのことを無視して、かれの教育理論をたんなる訓育手段の体系としてだけとらえることはできない。しかし同時に、マカレンコが当時のスターリン体制下のソビエト国家を無条件に肯定したことには、やはり限界があったというべきではないか。教育によって政治主体としての市民を育成するにしても、それは決して国家に無条件に服従する市民ではなく、むしろ国家を統制しうる主体的な市民の育成であるべきだろう。社会主義国家を着実に発展させる闘いこそ正義と信じられていた当時の状況では、マカレンコがソビエト国家を無条件に肯定したのはやむをえなかった面があるとはいえ、やはり今の時点でマカレンコ教育学の意義をとらえるには、そうした批判も必要ではないかと評者は思う。それは、ソ連の崩

壊と社会主義の退潮が起こる以前の、社会主義にまだ希望が見いだされていた時点でも、必要な作業ではなかっただろうか。しかも、それは決してマカレンコ教育学の価値を貶めるものではなく、むしろその普遍的な価値を現代により豊かによみがえらせる道であるように思われる。

このような問題点を含みながら、しかし本書は、マカレンコ教育学の、恐らくは初めての体系的な研究書として、高く評価される。社会主義の退潮とそれに伴う思想の混迷、教育現実の動揺と子どもの権利条約に立った新しい教育理念の模索という大きな歴史的転換点のただなかにある今こそ、われわれはあらめてマカレンコの教育思想に深く学ぶことが求められる。本書はそのためのすぐれた導きの書である。

(大空社刊 1997年7月発行 A 5判 262頁

定価 5,000円+税)